

「日本近代科学の生みの親」といわれる宇田川榕菴は、植物学だけでなく、化学も初めて日本に紹介しています。今回は榕菴の刊行した化学書『舎密開宗』について紹介しましょう。

養父の玄真を手伝って薬学の研究をしていた榕菴は、薬を作るためには西洋の化学の知識が必要だと気付きます。そこで、さまざまな蘭書を読みあさって知識を得ると、実験を行うようになりました。理論だけでなく、自分でも確かめる「親試実験」の精神が大切だと考えたからです。そうして21歳の時には西洋の「瀉利塩」という薬の成分を分析して、中国の「凝水石」と同じ物であることを突き止め、玄真を大喜びさせています。

天保5年（1834）、36歳になった榕菴は玄真を手伝って薬学書『遠西医方名物考』の補巻を刊行しますが、この中では元素についても紹介されています。実はこの「元素」も榕菴の作った言葉なのです。

その3年後の天保8年（1837）からは、日本で最初の本格的な化学書『舎密開宗』の出版を始めました。「舎密」とはラテン語系のオランダ語「セーミ」に当て字をしたもので、セーミとは英語でいうケミストリー、つまり化学のことです。この書は「近代化学の父」といわれるフランス人ラヴォアジエの学説を紹介した書（オランダ語版）を翻訳したもので、それに多くの化学書を参考にした解説も加えられていました。本の内容を確認するために自ら実験を重ねた器具が、早稲田大学図書館に残されています。

今でも使われている「酸素」「窒素」「炭素」「水

洋学博覧漫筆

～『舎密開宗』の刊行～

素」といった元素の名前や「酸化」「還元」といった化学反応を表す言葉は、この時榕菴によって作られました。

『舎密開宗』は内篇18巻を刊行した後、外篇3巻まで刊行されますが、榕菴が亡くなったために途中で中断してしまいます。しかし、こうした榕菴の取り組みが、日本近代化学の礎となったのです。



▲『舎密開宗』（津山洋学資料館寄託資料）

※透かしの家紋は右が眞作家、左が宇田川家のもの

5月中のひとの動き

人口	108,956人	(前月比△27)
男	51,922人	(同△29)
女	57,034人	(同+2)
世帯	43,774世帯	(同+50)
転入	197人	転出 230人
出生	73人	死亡 67人

(6月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



つ・ぶ・や・き

編集室

清涼感のある花・アジサイを7月中旬まで見ることが出来る所があります。それは阿波にある「高福寺」です。約1500株の丹精されたアジサイが境内や周りに咲いています。涼感と静寂に包まれた中に見えるのも趣深いですよ。(2)

今回の特集は「発達障害」。編集を終えて感じたことは、障害があってもなくても、子どもをまるごと受けとめたいという思いに、大きな違いはないということ。「子育ては大変で、楽しい」。みんなで励まし合っていきましょう。(和)

昨年の11月号で紹介したバルセロナ在住の画家・保田扶佐子さんから「津山の自宅にミニ美術館を作りつつあり」とのお便りがあり、秋にはオープン予定とのこと。「津山に芸術の発信地を作りたい」という夢が実現しますね。(＆)

つやま 広報

7 月号
平成21年
2009
657号

編集・発行 (毎月10日発行)
津山市総合企画部市長公室(市役所3階)
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

